

シンポジウム I：臨床検査技師養成課程において、真に学びのある連携教育とは？

1. 司会のことば

市野 直浩*

わが国の少子高齢化は、世界のどの国も経験したことがない速度で進行し、かつどの国も経験したことがない高齢化率に達すると予想されており、医療においては厳しい状況に直面している。質が高く、安心・安全な医療を求める患者・家族の声が高まる一方で、医療の高度化・複雑化に伴う業務の増大などによる医療現場の疲弊など、医療の在り方が根本的に問われている中、「チーム医療」の推進は非常に重要である。チーム医療（連携医療）を担う人材を育成する

教育課程において、専門職連携教育（IPE：Inter-professional Education）が重要であることは言うまでもない。世界保健機関（WHO）もその必要性和重要性を 2010 年に発刊された“Framework for action on interprofessional education & collaborative practice”の中で述べている。具体的には「専門職連携教育は、現場の医療ニーズにより的確に対応できる、連携医療の即戦力となる医療人材に必要な不可欠なステップである」としている（図1）。

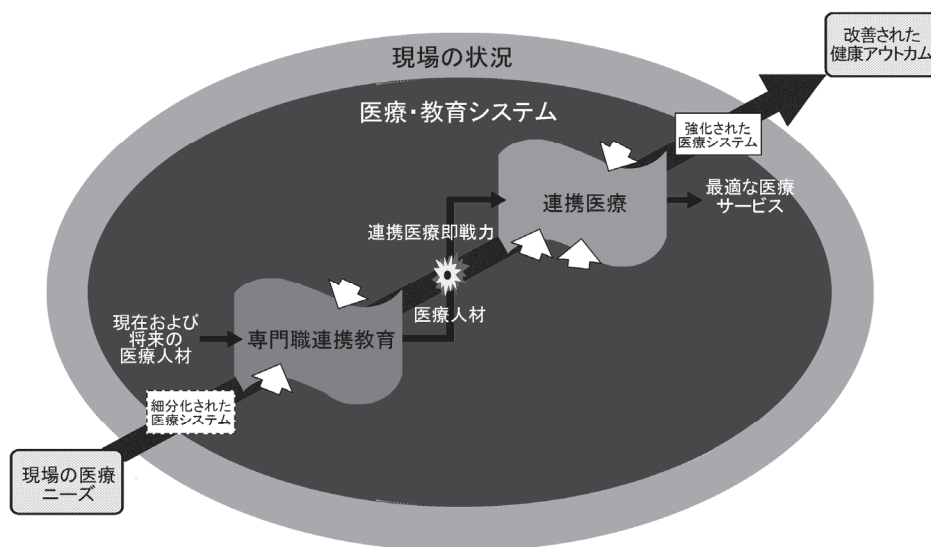


図1 医療システムおよび教育システム

「専門職連携教育および連携医療のための行動の枠組み ©三重大学 2014」より引用

*藤田保健衛生大学 医療科学部 ichino@fujita-hu.ac.jp

第12回日本臨床検査学教育学会学術大会の大会長は、埼玉県立大学 保健医療福祉学部の松下誠先生がその大役を務められた。大会のメインテーマは『つながりを創る』であり、その中には「他の専門職との連携」ということも含まれていた。埼玉県立大学では、その教育を象徴するひとつとして専門職連携科目の科目群がある。これは1年次から4年次にかけて体系的にIPW (Interprofessional Work, 専門職連携)を学ぶものである。今後、ますます重要となるIPEをシンポジウムのテーマとして取り上げた「シンポジウムⅠ：臨床検査技師養成課程において、真に学びのある連携教育とは？」は、松下先生からすれば必然であったのかもしれない。筆者が本原稿を執筆するにあたり、これまでに11回行われてきた日本臨床検査学教育学会学術大会においてIPE関連をテーマとしたシンポジウムやパネルディスカッションがどれだけ行われたかについて確認したところ、残念ながら一度もなかった。IPEの必要性と重要性が叫ばれる中、今回初めてIPEをテーマとしたシンポジウムが開催されたことは、非常に意義のあることだと思っている。

今回のシンポジウムでは、筆者を含め4名のシンポジストの先生方にご講演を頂いた。いずれもIPEを積極的に実践している大学の先生方である。

まず初めに、筆者から本学で実施している専門職連携教育プログラムである「アセンブリ」について紹介した。アセンブリは本学の医学科、医療科学部6学科の学生が合同で実施するIPEである(1年次のみ看護専門学校も参加)。1年次には班活動、2年次にはチーム単位で行うプロジェクト活動、そして3年次には近隣大学の薬学部および社会福祉学部の学生も参加したチーム基盤型学習(TBL)を実施するなど、3年間の活動を通して将来医療の専門職として社会に貢献するために必要な専門職連携の基盤づくりを目指している。本学では、今年度より大学内にアセンブリ教育センターを設立し、学

部・学科の枠を超えて全学的にアセンブリ教育を推進させる組織も整えた。

次に、群馬大学大学院保健学研究科の松井弘樹先生には、群馬大学医学部保健学科で行っているIPEの取り組みについてご講演を頂いた。群馬大学医学部保健学科は、IPEを教育指針の柱としてカリキュラム構築を行っており、2007年には文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム、2010年には文部科学省の大学教育推進プログラムにそれぞれ採択された。さらに、2013年には日本で初めて多職種連携教育のWHO協力センターに指定されるなど、その取り組みに対する評価は非常に高い。松井先生は、多職種連携教育の講義および実践、また多職種連携教育推進室委員として国際的なIPE・IPWの実施状況の調査やエビデンスの検証なども行うなど、非常に積極的にIPEに携わっておられる。

次に、北里大学医療衛生学部医療検査学科の吉田玲子先生には、「オール北里」として行っているチーム医療教育プログラム(演習)についてご講演を頂いた。北里大学は薬学、医学、看護学、医療衛生学の医療系4学部を含む7学部、さらに保健衛生専門学院と看護専門学校の2専門学校があり、それらの学生が一堂に会して行うチーム医療教育プログラム(演習)を実施している。平成29年度は、実に参加学生数約1,100名、ファシリテータを含む演習担当教員約140名が参加して行われ、その内容を詳細にご紹介頂いた。

最後に、本学術大会の担当校である埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科の井原寛子先生に、埼玉県立大学で実践している連携教育の取り組みについてご講演頂いた。埼玉県立大学では、開学以来「連携と統合」を教育の柱として連携教育に取り組んでいる。5学科5専攻の学生が1年次から4年次にかけて体系的なIPEを実践しており、特に4年次に行うIPW実習は、埼玉県全域の病院、福祉施設、行政機関、NPO法人など80余施設で4日間の臨地実習形式にて実施しており、他では見られないような連携教育を実施している。井原先生は現在、IPW科

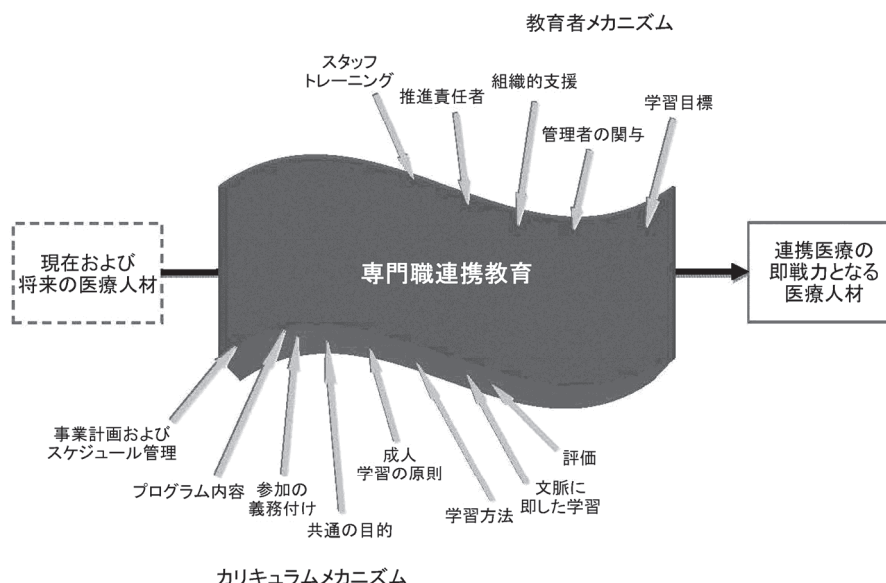


図2 実践レベルにおいて専門職連携教育を形成するメカニズムの例
「専門職連携教育および連携医療のための行動の枠組み© 三重大学 2014」より引用

目責任者会のメンバーとして IPE を推進されている。

それぞれの大学で実践している IPE の取り組みの詳細については、後項でそれぞれの先生方が報告されているので、是非とも読んで頂きたい。いずれの取り組みも非常に興味深く、また素晴らしい取り組みである。しかし、それらと同様の取り組みが各養成校においてすぐに実施できるかと言うと、勿論、それは無理だということでは誰もが理解しているところであろう。IPE を実施するためには、大学レベルあるいは学部・学科レベルの協力および教職員の協力が必須であり、また非常に多くの準備も必要となる(図2)。多くの協力と多大な労力ならびに時間を要する IPE ではあるが、将来、医療の現場でチーム医療を担う一員を養成するためには、必要

な教育であることは言うまでもない。本シンポジウムが、既に IPE を実施している養成校にとっては、さらに良いものにするための参考になりうること、そして未だ IPE を実施していない養成校にとっては、導入のきっかけになることを願い、より多くの臨床検査技師養成校で IPE が実施されることを望む。

今回のシンポジウムの司会を埼玉県立大学学長 萱場一則先生と共に務めさせて頂いた。萱場先生から実質的な進行役を仰せつかったものの、私の不手際により質疑応答の時間がほとんど取れなかったことに関しては、お詫び申し上げます。また、ご講演頂いたシンポジストの先生方、当日、本シンポジウムにご参加頂いた多くの皆様には心より感謝の意を表したい。